

平成27年度スーパーバイザー事業報告書

## 研究テーマ「自己指導能力を高める指導の実践 ～生徒指導の三機能とESDを生かして～」

三朝町立 三朝中学校

スーパーバイザー：国立教育政策研究所 西野真由美 総括研究官

### 1 はじめに

今日の社会において、高齢化・過疎化、薬物事件、社会モラルの低下等がクローズアップされている。また、家庭においては、少子化、核家族化、育児放棄の増加等生徒を取り巻く環境が変化している。学校現場においては、基本的な生活習慣の乱れ、不登校等、現代社会のひずみが色濃く反映されてきている。その中で、家庭における教育力の低下と地域が補っていた教育機能が弱まったことで、大切な道徳性を身につけていない生徒が増加していることも事実である。

そこで、本テーマを実践することで、『自己指導能力を高めることにより、生徒個々が現状の課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度が身に付き、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことができるであろう。』という仮説を立てた。

道徳的心情が「よりよい生き方を実践するために必要な意志や志向」であり、自己指導能力は「考え、判断し、行動する力」である。道徳的心情や自己指導能力は、「善」や「正しい行動」の根幹になる意志や志向が育たないと、判断・実践に結びつかないものである。

そこで、道徳的心情が育てられることにより道徳的判断力につながり実践力となり、豊かな道徳性が育つ。豊かな道徳性は、よりよく生きることと捉えることができる。そのために、「生徒指導の三機能」と「ESD」を融合させた視点で授業改善を図ることで培うことができると考えた。

本年度は研究二年目として引き継ぎ、「昨年度の研究課題」および「授業構造」について研究を行った。

### 2 研究のねらい（昨年度より）

①道徳性を養うための「道徳の時間」の活用法を研究し、実践する。

→道徳性をどのように育てるか、教材や発問の工夫、授業構造を考える。

②「道徳の時間」だけでなく、他教科の授業・指導の場面を含め、「道徳教育」を推進する。

→今年度も引き続き、国立教育政策研究所 教育課程研究センターよりスーパーバイザーとして西野真由美先生を招聘し、研究を深めた。

### 3 研究内容 ※主たる研究の概要のみ記載

#### 《1学期》各学年の研究発表

「研究のねらい」について各学年で研究を進め、西野先生よりご指導いただいた。

##### 【1年生】

- ・ジレンマ教材は、結論に優劣がないように
  - 優等生なら「こう言う」というものでなく、優等生でも悩むようなもの
  - 本音を言って人格を疑われるようなジレンマ教材は使わないように

##### 【3年生】

- ・「C商業にする」というところを見せるのは良くない
  - 商業に行きたい生徒への配慮をする
- ・価値基準で必ずしも1の生徒が5より低いということではない
  - 「こう言う理由だから高い」ではない
  - いろんな見方を広げて、最終的に1の理由でも問題ない

##### 【全体】

- ・子どもを見るという視点でやっていくのはとてもいい
- ・ココロ部（NHK）教材がオススメ
- ・評価するという事は「生徒理解をする」ということ
- ・相手を説得させる話し合いは、自分の根拠を持たないと言えないので有効
- ・今の道徳では「AかB」だけでなく「C」という新しい発見を求めていくことも大切に
- ・日本は世界でも「自分が参加したら世の中が変わると思うか」のデータが低い
  - 学校のなかで「自分たちで変えていける」という場の設定を
- ・グループワークでいろんな人の意見を聞ける雰囲気づくり（土台づくり）をしよう
- ・グループワークで意見が分かれたとき
  - 個人で最後に結論を出すだけでなく、  
みんなで一つの意見にしていくのも大切、折り合いつけながら話しができる

#### ①ワークシートの最後のところは「感想」ではなく、「印象に残った考えは？」とか

「気づいたことは？」というものに

→振り返らせるということ

→続けていくと、途中で友だちの考えを聞くようになっていく

#### ②授業の終末で、授業をとおして先生が面白かったり学んだりしたことを生徒に伝える

- ・2学期は授業の進め方の研修をしていくとよい

【2学期に共通して取り組むこと】

○授業の進め方（終末については、上の①②を入れる）

→単に授業案を考えるのではなく、ピックアップメンバーの「変容のとらえ」より、「手だて」をしていくという視点を入れる

→指導展開部分を簡単にでも書き入れ、授業後にメモ書きで残す

○道徳の時間での変容を学年で共有する（フォルダに入れたり口頭で伝えたりなど）

→教科で補充していく（ピックアップメンバーだけでも）

○ローテーション授業の実践

《2学期》研究授業 ～「2学期に共通して取り組むこと」を中心に～  
実践したことの研究授業を行い、西野先生よりご指導いただいた。

西野先生より

- ・自作資料は大歓迎！これからの授業アイデア募集中（文科省）
- ・グループで話し合っている今の方向を大切に！

【指導助言】

① テーマ（1年生）について

・全学年でやるのも面白い

・今回のねらいとのつながりで、今楽しいことは良いが、理想を持てるようにしていこう

→「よりよい大人になる」を根底として、「なりたい姿をイメージしてがんばろう！」というゴールに

・（ア）ねらいの表現方法を考えよう「理想を持てるようにしていこう」とか

【補足】問題解決・追及について

→「大人でいたい？いたくない？」はYes No でいえるので、

→「どっちが自由なんだろう？」（そういう視点で話ができる）とか

→「二十歳になったら大人なの？」とか、（イ）深まる問いにしよう！

※ちなみに、「早く大人になりたい？」という副詞をつけないこと！

いずれなりたくても、今はなりたくない子もいるので

② 思考を深める手立てについて

・それぞれの立場の理由について分析を深める（吟味する）

→「働く」ってどういうことなのかな？など

・「聞いて終わる」だけだと深まらない

→他人に対してのかかわりをつくる！

→「こんな大人になりたい」というものを班で作ると、共同作業になる

→その（ウ）グループワークが深まりに貢献する！

・大人になるポジティブな視点を入れよう

③ 評価について

・子どもの意見から評価できることは良いが、(エ) 自己評価の工夫をしよう

→たとえば、「なりたい姿のイメージを持ってましたか？」とか

「今回の授業でいいなと思った友だちの発言はなんですか？」とか

→とにかく、プレッシャーなく「C」がつけられるような項目を工夫しよう

→「変容」は、「広がった」「イメージが持てた」「意見が変わった」などいろんな視点がある

## 【3学期に共通して取り組むこと】

○2学期に引き続き、授業構造について考える（上のア～エを念頭に）

→ピックアップメンバーの「手だて」をしていくという視点を入れる

→2学期同様、授業メモを必要に応じて使う

○道徳の時間での変容を学年で共有する（フォルダに入れたり口頭で伝えたりなど）

→教科で補充をしていく（ピックアップメンバーだけでも）

○ローテーション授業の実践

## 《3学期》研究授業（別紙）指導案

1・2学期の取り組みより、授業構造を中心に取り組んだ。

## 【各学年より】

	良かった点	課題点
1年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段言えないことが言えていた。</li> <li>→「なんか今日、嬉しい」自尊感情</li> <li>・ICTの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し合いの視点が変わらないような工夫が必要。</li> <li>・班長任せにならないように。</li> <li>・ICTに目がいくと、内容が入らないかも。</li> </ul>
2年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価しやすい工夫があった。</li> <li>→ABCでなく、☆の数での評価</li> <li>・他の助言を自分でまとめる時間が深まりにつながっていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・助言を素直に受け入れない場面があった。</li> <li>・単に他の意見を書いているだけの生徒に対する手立てが必要。</li> </ul>
3年生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・助言を受け入れているときが変容しているときだった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼンは流れてしまうので、重要ポイントは印刷するなどの工夫が必要。</li> <li>・助言が責め合いになる危険性もある。</li> <li>→学級の実態に合わせる</li> <li>・並び方の工夫が必要</li> <li>→男子対女子にならないような</li> </ul>

【西野先生より】

- ・「楽しい」だけでなく、子どもたちが考えていたとても良い授業。  
→子どもたちに次の問いが生まれていた！
- ・「読み物資料」で「今日はこれについて」だと、自身に何の問題意識もないので深まりが薄い、自分たちの意識に直結する内容で良かった。  
→子どもの中に「問い」や「願い」がないなかで展開するのは、耕さない中で種を蒔くと同じ！

<p>① グループの話し合い・使い方について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グループの話し合いは普段から積み上げる。 →相手を傷つけないように話したり助言したりすることは、<b>訓練が必要なこと</b>。 →その際、きちんと考えて話せる実態なら任せてよいが、 そうでなければ「相手を傷つけないように助言しよう」など<b>ステップを考える必要がある</b>。</li> <li>●アクティブ・ラーニングにはメリットがある。 →子ども同士で話し合ったあとに先生が話すと、 子どもの耳・心が起きて「先生の話聞いてみよう」となってくる。</li> </ul>
<p>② 授業構造について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ICTの良さは事前に準備しておけること。板書の良さは「その場で作っていける」こと。 →ICTと板書を共有していくとよい。</li> <li>●「時間を区切ること」は思考の分断という懸念もあるが、それでもよい。 →子どもはゲーム感覚で、時間に収めようとするし、「もう少し話したい」くらいがいい。</li> </ul>
<p>③ 授業のステップアップ・アドバイス</p> <p>☆そもそも「大人の理想像」を持つのはなぜ大切なのか、を考えさせる。 ☆「子どもでいたい生徒」へのフォローが必要。「子ども」も「大人」も「自由を求めている」ことは共通なので、「自由を大切にしながら、どのようにすれば大人になれるかな？」という形だと、フォローになる。 ☆「理想を持つことって、なぜ大切なのか？」というまとめもある。</p>

#### 4 スーパーバイザーの役割

鳥取県教育センターのスーパーバイザーである国立教育政策研究所総括調査官の西野真由美先生を校内研修会や授業研究会に招聘し、特に「授業構造」に対してご助言していただいた。

「3. 研究内容」のように、授業の中身や取り組み、研究内容についてさまざまな視点でいねいに教えていただいた。職員自身が「次の問い」を持って日々の授業実践に生かすことができた。

## 5 研究のまとめ

### (1) 【成果】

- ①西野先生より、テーマの実践で肯定的評価をいただき、自信を持って全職員が授業実践を行うことができた。
- ②毎学期の指導助言により、生徒の変容をとらえた上で、授業構造を工夫することができた。  
→生徒に自尊感情が生まれたり、積極的に考えたりする場面が増えた。
- ③本研究をとおして、職員の中に「次の問い」が生まれ、研究内容について話し合ったり、授業構造を考えたりと、道德教育を推進することができた。

### (2) 【課題】

- ①生徒の変容をとらえ、適切な指導を行える工夫をする。  
→ワークシートの活用、他教科での補充など
- ②今年度の研究の成果を、来年度さらに発展させていくための研究を継続する。
- ③3年間のスパンで子どもたちが「こんな風に生きていきたいな」と思える指導計画や授業構造を研究し、成果のあるものを残していく。

## 6 おわりに

二年間の研究を終え、生徒の評価が上がったこと、授業構造が少しずつ明確になったことは大きな成果であった。各学年で課題意識を持って研究を進めるにつれ、「次の問い」が生まれ、自主教材を作成したり、授業構造を研究したりと職員の意識が高まった。職員自身が考えることが、よりよい授業に繋がると確信できた。

スーパーバイザー事業による研究をとおして、西野先生から「職員で研究を深める『あり方』」を学ぶことができたと考える。日々の実践から課題意識を持ち、次の問いを見出すことは、生徒だけでなく我々職員にとっても重要なことである。この『あり方』を大切に取り組むことで、本校の研究がいつそう推進すると考える。西野先生にご指導・ご助言していただいたことに感謝し、今後も研究を続けていきたい。